

今、十勝うらほろで起こっていること。

次世代に繋がる社会づくりへの協働のアプローチが
関わる人たちの生き抜く力を育む！

(令和4年度第1回北海道総合教育会議 説明資料)

一般社団法人 十勝うらほろ楽舎
代表理事 近江 正隆



20代の若者の人口が増え始めている町「浦幌町」

2019～21年の町内の社会動態に関し、
20～24歳は転入者が計111人に対して転出者が計86人、
25～29歳は転入者計87人に対して転出者計78人、
3年間で20代の転入者が転出者を34人上回る。

水澤一廣町長は、以下のように発言。

**「関係人口という意味で様々な人材が浦幌に来ている。
うらほろスタイルから派生した事業も要因だろう」**

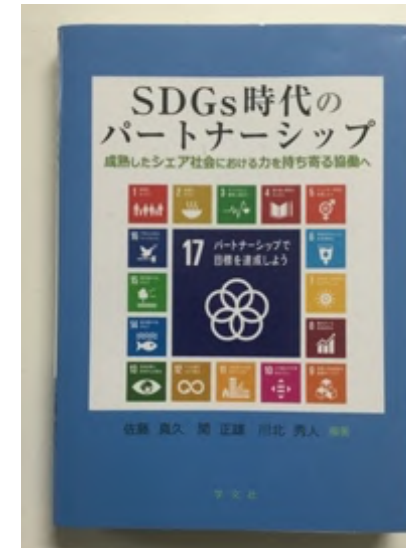
(浦幌町議会定例会 2022.6)



子ども若者（次世代）を軸にしたまちづくり

うらほろスタイル

- ・ 30年間で人口が半減した浦幌町が予算化した取り組み
- ・ 浦幌高校廃校の危機感から16年前にスタート
（廃校時の町内学生の進学率はわずか15%）
- ・ 浦幌町内の小中学校を中心に、子どもたちを軸とした**持続可能なまちづくりを目指すプロジェクト**
- ・ 「**地方創生×教育**」の**先導モデル**として、文科省、内閣府などや研究機関から高く評価される
- ・ 子どもたちの自己有用・効力感の向上にも寄与
- ・ うらほろスタイルを参考に文科省が数々の施策を展開
- ・ 国の委託を受け、地域と学校協働のエントリー研修（文科省HPからダウンロード可能）が浦幌発で誕生
- ・ SDGs時代のパートナーシップ（学文社）で大きく特集



様々な人材・企業が集いはじめる“新たな協働モデル”

一般社団法人 十勝うらほろ樂舎

- ・ 十勝うらほろ創生キャンプを運営するために設立
- ・ 30年前に東京から移住し、うらほろスタイル立上げに貢献した近江正隆が代表理事に就任
- ・ 元メルペイ取締役、**フォレストデジタル**CEO辻木勇二、北村林業及び**バトンプラス**代表の北村昌俊が副代表
- ・ 理事には、元ヤフー「ミスター検索」神戸市CDO補佐官で兵庫大教授の宮崎光世、元文科省CS担当の上田真弓、ロート製薬営業マネージャでバトンプラスの佐藤功行、A-bank北海道代表の曾田雄志、大正大教授の浦崎太郎等
- ・ 実働スタッフは、文科省やオリエンタルランド、ワタミ、ロート製薬などからの転職者と企業からの出向者、地域内外出身の若者や、副業で関わる企業在籍者等
- ・ 東京や札幌などの**ふるさと納税寄附企業と協働**で事業も実施している



十勝うらほろ樂舎とは

地域とともに歩みながら
都市の社会人や企業と連携する
「新たな協働のカタチ」を軸に
関わるを持つ者同士が学び合い
次世代につなぎ続けられる社会
をつくることを目指す。



- ・ 生きるチカラを育む 「ひとづくり」
- ・ 次世代に引き継げる 「まちづくり」
- ・ 活動を継続的にする 「資本づくり」



持続可能な
地域社会づくり



16年間の礎の上に築く未来を踏まえた本質的な連携スタイル



本質的な連携によるシナジー効果①

副業を推進する企業で働く「企業人」×「地域住民」で新会社を設立

■ 自然×IT（デジタル森林浴）

フォレストデジタル株式会社



リフレッシュ＆
コミュニケーション
スペースとして
多くの企業が注目！



十勝総合振興局
とタイアップ協定
も締結

■ 林業×高付加価値（製品開発）

株式会社BATON PLUS

床材・アウトドア&テレワーク
商品を開発・販売



企業人の副業モデルとして
「日経新聞」「カンブリア宮殿」
などで紹介！

本質的な連携によるシナジー効果②

心から繋がる“協働”が生まれた

“できない”を認め合い、感謝し合う関係性



木を植えて、木を育て、
木を切ることはできる！
でも、付加価値をつけて
売ることができなかった

町の林業会社社長

営業・マーケティングの
経験を活かし木材を販売
でも自分たちは木を
育てていくことはできない

大手製薬会社勤務



バトンプラスのチャレンジは
「資本づくり」へのヒントが満載

未来が自分ごとになった



子どもたちのことを真剣に
考えたら、地域や社会の未来
を考えるようになった。
挑戦する背中を子どもたちに
見せ続けられる大人でいたい
町の印刷会社社長

子どもたちが未来を生き抜く
チカラを育みたい！
スポーツを軸とした
プロジェクトを浦幌で
生み出したい！

大手製薬会社から転職



関わる大人たちが「次世代に繋ぐ
持続可能な社会づくり」の当事者に



大事ななのは、「今」の時代しか考えない形式的な連携ではない、本質的な連携。「今」だけを考えない「未来」を思う「次世代を中心に据えたまち」を目指す未来想い、未来を見据えた「本質的な連携」。

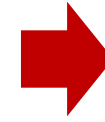
分業化が進み、効率化が進むが企業（都会）では学べないことがある。それは非効率からの学び。地域発のプロジェクトは、一つの役割ではなく全部をやらなければならない環境となる。そして、「人」や「物事」にじっくり向き合わなければ前に進めないという地域の環境は、関わる人たちの「洞察力」を高めるきっかけになる。

失敗してもいい。そもそも、過疎が進む課題山積の地域では何が正しいことなのか分からない。ある意味全部「正解」。失敗も正解の一つ。

浦幌町のような本質的な連携ができる「土壌がある地域」「丁寧な関わりができる地域」は、関わる「ひと」を育てる。

本質的な連携によるシナジー効果③～関わる企業にメリットも！

企業版ふるさと納税の活用！



節税にも貢献！

持続可能な社会づくりに貢献する
「SDGs教育旅行プログラム」の共同開発



開発したプログラムを
他地域でも展開準備！

「沖縄（恩納村）」
「福岡（北九州）」
「妙高市（長野県）」など



コロナ禍を乗り越え、
働き改革を実現する
社内改革の糸口発見！

「社会公募制度」
「社員研修」など



「育つ出向」を発見！
広い視野を持ち、企業
の未来を考えられる社
員の育成に効果的！



「次世代に繋がる社会づくり」への大人たちの関わりは、様々な協働を生み出すきっかけになり、さらには持続可能な社会への大人たちの当事者意識を育むきっかけになっている。

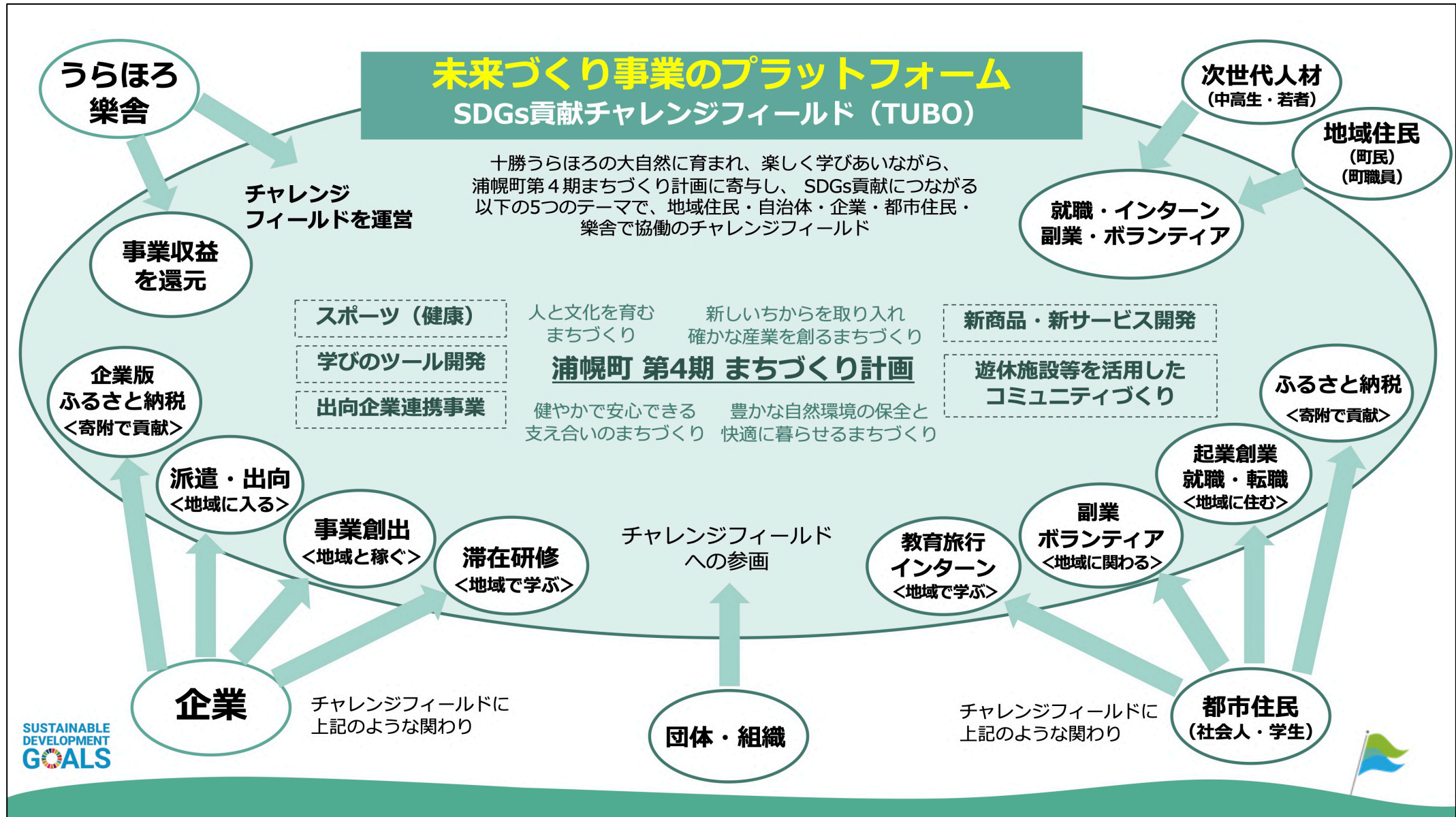
コロナ禍は、予測困難な未来社会を先取りしたチャレンジ期間。そこでの協働で行われる事業の創出は、学び多きアプローチ。正解がない（全てが正解）の中で、異なる意見に耳を傾け、でも傾け過ぎて全てが前に進まないことにならないように、本質を見抜いて次世代に繋がる社会づくりに寄与する判断ができる（洞察力が身につく）貴重な機会。



次世代に繋がる社会づくりへの協働のアプローチが関わる人や関わりを持つ企業・組織自体の生き抜く力を育んでいる。



(これからの展望) 浦幌町との協働構想



学ぼうとして、学ぶのではない、学びをつくりたい！



東京生まれ。30年前に浦幌移住 うらスタ（16年前）・樂舎（3年前）を立上げ

北の国からに憧れ北海道に移住。念願の漁師になる。
不安定な収入を補うために加工＋ネット産直を始め成功！
しかし転覆事故に遭い、生き方を180度転換。
未知領域である教育・まちづくりにチャレンジ。
30年間の私自身がずっとVUCA状態。

学ぼうとして学ぶのではない、次世代につながる
「SDGs貢献」を地域で実践することこそ、最大の学び。
一緒にワクワクしながら、
たくさん失敗しながら、浦幌町民＋浦幌に集まる方達と
一緒に予測不能な困難を楽しんでいきたい！

浦幌に集まる「次世代に繋がりたい！」とワクワク活動する大人
たちの生き方に触れ、自身の未来を考える新たなきっかけを中高生に見つけてもらい、自分が関心ある事業に関わってほしい。

